

長生炭鉱犠牲者大韓民国遺族会と共に

長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会

1. 長生炭鉱水没事故の概要

山口県宇部市の東部、瀬戸内海に面した床波海岸に、まるで墓標のように、旧長生炭鉱の2本のピーヤ（排気・排水筒）が海面から突き出ている。

長生炭鉱は、山口県宇部市の東部、瀬戸内海に面した床波海岸にあった。当時山口県には多くの炭鉱があり、その中でも長生炭鉱は海底坑道の危険な炭鉱で、全国的にも比較的朝鮮人労働者の多かった山口県の中でもずば抜けて朝鮮人労働者の数が多く、「朝鮮炭鉱」と呼ばれていたという。

1942年2月3日早朝、海岸の坑口から1000メートル以上沖の坑道で異常出水が始まり、水没するという大惨事が起こった。（※この水没事故のことを炭鉱用語で「水非常」という。）そして、この事故の犠牲者は183名、そのうち137名が朝鮮人労働者であった。

この事故の後、この事実は全く語られることなく、宇部の歴史から抹殺されていった。

2. 長生炭鉱の“水非常”を歴史に刻む会発足～「死者への手紙」から韓国遺族会結成へ

1991年3月18日に「長生炭鉱の“水非常”を歴史に刻む会」（以下、「刻む会」とする）は、①ピーヤ（坑道の排気排水筒）の保存、②事故当時の証言集の作成ならびに資料の収集、③日本人としての謝罪の文言を含めた碑文と犠牲者全員の氏名を刻んだ追悼碑の建立を目標として活動を開始した。

しかし、事故直後に作られたという西光寺の位牌187体、大日本産業報国会編「殉職産業人名簿」、会社側鉱務課作成「集団渡航鮮人有付記録」に記載された名簿は創氏改名された名前がほとんどであり、私たちは碑を建立するにあたって、本名を探し当てねばならなかった。そこで、殉職産業人名簿記載の住所宛てに日本人としての謝罪と共に、通称名ではなく本名で碑に刻みたい旨の手紙を118通送付した。

これに対し、韓国から17通もの返信があった。返信の手紙には、私たちの手紙で初めて父親が日本の「長生炭鉱」の事故で亡くなったことを知ったという方もおり、「父の死亡日時だけでも分かり感謝いたします」とあった。

この「死者への手紙」は韓国国内で大きな波紋を広げ、「死者への手紙」が届かなかったご遺族からも返信があったのだ。それは私たちの予想をはるかに上回る勢いで、個がつながり、犠牲者が同郷であったり、親族であったりと遺族同士のつながりが広がって、翌年の1992年には「長生炭鉱犠牲者大韓民国遺族会」（以下、遺族会という）が、55人ものが員が集まって結成された。それは、京都在住のご遺族「李元宰」（イ・ウォンジュ）さん（2001年死亡）が、遺族の皆さんと私たち日本人との懸け橋となっ

て奔走された成果だった。

1992年8月には遺族会から二人の代表が李元宰さんと共に現地海岸を訪れ、チェサ（祭事）を行って花束を捧げた。「あまりにも殺風景で祈りの杯をささげる場所も腰をかける施設もない。これが、人命を尊重する法治国家の礼儀か」と憤り遺骨の収集を訴えた。そして、多くの遺族が現地を訪れ、追悼を願っていることを知り、毎年命日に御遺族を招き追悼集会を挙行することとなった。招聘費用は全て市民の募金でまかなった。当初は釜山からのフェリーは1日おきの運航であったため、2泊3日の行程で宇部市役所、山口県庁への表敬訪問（要請行動）、追悼式、市民交流集会、そして夜が更けるまでの「刻む会」との絆が深まる交流を行った。行政への表敬訪問をしなくなってからは1泊2日の行程にはなっているが、今日（2020年）まで途絶えることなく毎年続けている。

一方で、1994年5月には遺族会の総会があり、山口武信代表（2015年死亡）をはじめ4名が初めて訪韓し、慶尚南道の道庁を訪問して本名究明の協力や遺族探しをお願いし、総会に出席し御遺族の証言を収集したりもした。その後も、不定期に数年に1度の頻度ではあるが、遺族会総会が開催されることもあり、その時には、「刻む会」から数名参加した。

このような毎年の追悼集会や遺族会の総会出席を通して、お互いの関係は深まっていったといえる。しかしながら、「刻む会」と遺族会のこの関係は、知らないうちに、被害者の声を抑制するという弊害を生んでいた。

遺族会は、行政との交渉の場でも、言葉を選び紳士的に自制的に申し入れを行い、たまに遺族の一人が声を荒げて訴えようとしても遺族の本音を抑えた形式的な場に終始した。在日遺族の李元宰さんは、行政交渉の場には自ら出席を拒否されていたが、それは自分が参加すると怒りが爆発して何をするか分からないからと自制していたことを後に知った。また、1995年の追悼集会の折、アボジをなくされた朴源奎（パク・ウォンギョ）さんは、日本にたいする弾劾の言葉を話そうとされたが、その時、彼の体中に震えが起きて止まらなかった。ようやく彼がしゃべり始めると遺族の皆さんが彼にそれ以上言うなと口々に止めたのだった。

私たち「刻む会」と接触が始まり、日本人に対してそれまでもっていた悪のイメージから「こんな良い日本人もいたのだ」という驚きと共に、「迷惑をかけてはいけない」という暗黙の示し合わせのような、あるいは明確に確認していたかもしれないが、遺族会にはそのような雰囲気形成され始めていた。

そのため、当り障りのない表敬訪問は遺族会にとって希望の見えないものとなり、2010年を最後に遺族会の意向に従い取りやめとなった。その後、「刻む会」として宇部市並びに山口県と交渉を重ねているが、行政訪問を取りやめたことで、行政は直接糾弾されることがなくなり、対応はどんどん後退し、日韓関係の変化も相まって、国に要望を伝えるにとどまっている。

3. 2013年追悼碑建立に向け、遺族会の「本音」が奔流のごとく

「刻む会」の目標の一つである追悼碑建立のためにはまず、土地の確保が第一であり、その土地は墓標のようなピーヤが見える炭鉱の跡地周辺であることが遺族会の望みであった。しかし、その周辺はもともと炭鉱主の「頼尊」家の所有地が多く存在し、頼尊家の協力は得られず土地探しは難航し、建立まで

22年もの歳月がかかった原因の多くはここにある。

2008年にピーヤからは少し離れているが一般の売り土地を見付け、その土地を購入した。その時遺族会と「刻む会」はこれでやっと追悼碑の建立に向け動き出せるという喜びで一杯だった。

具体的にどのような追悼碑を建立するかというイメージのすり合わせに入ってから、遺族会と「刻む会」との間に大きな認識の相違が露呈することとなった。「刻む会」は日本人犠牲者であっても大きな意味で戦争の犠牲者であり、日本人を含めた追悼碑の建立をめざしていたが、遺族会は韓国人犠牲者のみを追悼する碑を建立してくれると思っていたという。

それは1992年の追悼集会開催当初から、追悼式は韓国人遺族のみが出席し、韓国式チェサで追悼してきた現実があり、そう受け止められても仕方がない成り行きがあった。

「アボジをいじめたかもしれない日本人に頭を下げることはできない」というのが遺族の悲壮な想いで、遺族会の総意であり、「刻む会」の案は受け入れ固いというものだった。

急遽、「刻む会」の2名が韓国に飛び直接話を伺うこととなった。2011年より韓国在住日本人が遺族会の専属通訳として通訳をしてくださっていて、その時には本音で話し合うことができた。孫鳳秀(ソン・ボンソ)事務局長は天安市にある「独立記念館」に案内し、日本帝国主義がいかに朝鮮半島を蹂躪し全てを奪い尽くしたかを示唆してくれた。館内には強制連行・強制労働の象徴として「長生炭鉱の水没事故」の模型も大きく設置されていた。その折に、折衷案として、ピーヤを模した二本の追悼碑としてはどうかという案が浮上り、帰国後、「刻む会」内部で討議することとなった。何度も意見交換を重ね、激論の末、遺族の思いに添うべきだとの結論に達した。また、遺族会も長年の「刻む会」との信頼の上に「刻む会」の意向を尊重するとの合意に至った。

そして、ようやく2013年に追悼碑建立が実現した。「日本人犠牲者」と「強制連行韓国・朝鮮人犠牲者」の二つのピーヤに模した碑は3メートルの間があるが、それは二つでひとつの碑として建立し、訪れる方々にその碑の在り方を問うているように思う。

4. 追悼碑建立後、遺骨発掘返還に向けた新たな出発

さらに、2013年追悼碑が序幕された直後の追悼集会は、「刻む会」に対して遺族会からの糾弾の場となった。「刻む会」は追悼碑を建立してこれで幕引きをしようとしてないかと…。確かに「刻む会」は念願の追悼碑をようやく建立したという安堵感に包まれていたし、運動のひとつの区切りとなったと受け止めていた。遺族会の金亨洙(キム・ヒョンソ)会長並びに孫鳳秀事務局長は、「遺骨を収集して故郷に安置したい」「ここにお集まりの日本人の皆さんが強く日本政府に訴えてほしい」と並々ならぬ決意を持って、加害国、加害者への鋭い糾弾ともいえる発言をされた。それを受けて山口武信代表は、いたたまれず再度壇上に上がり、「一番心にかけていることは遺骨。…出そうと思えば出せないことはない。…そこまでいって初めてこの事業は終わるんじゃないかと思う…」と集会を結び、それが彼の公式の場での遺言となった。

そして、翌2014年「刻む会」は「遺骨発掘収集」という果てしない目標に向け新たな組織体制のもと再出発をした。発足当時から遺族会は遺骨発掘を要望し続けてきていたが、私たち「刻む会」は自分

たちの力量を鑑み、遺族会の願いを側面から支援するに留まり、遺族の切なる願いを自らの課題とすることに躊躇してきた。それは日本人側の独りよがりの運動だったと言われても返す言葉もない。しかしながら、今からでも遺族の切なる願いの実現は可能だと信じたいし、今までの28年に及ぶ遺族会との絆の上に本音で語り合い、心から連帯し、共に「遺骨発掘収集」に向け強力に歩みを進めていきたい。